

特集

「つながる」の先に。



OOS

MAGAZINE EPISODE.2

に広がる約193平方メートルの大塚オープンスペース（Oos）で繰り広げられるイベントや展示が、何やら最近賑やかないと人気となっています。

ここ文京区には、地域の人、組織、活動など、価値ある資源がいっぱいあって、それらを紹介して繋ぐ空間としてOosが機能しているのです。

さて、Oosマガジンは、Oosでの活動に関わった参加者によつて、執筆・制作している地域のミニコミ誌。エピソード2の本号のテーマは、「つながるの先に」。参加者一人ひとりの地域への思いと暮らしぶりがその先を浮き彫りにしていくことでしょう。

▼まず表紙を飾るのは、シンガーソングライターの鈴木あいさん。窪町小一中卒と、地元生まれの地元育ち。震災以降100回以上気仙沼を訪れ、音楽を通した復興活動を継続しています。今年から大人に向けた童謡を発信するオトナの童謡プロジェクトを始動し、その歌声を地域の高齢者施設などに還元していくこと。

▼Oosでは、地域の企業もその活動に参加しています。絵本で知られるア

Oos MAGAZINE EPISODE.2



リス館さんには、企業が地域活動に参加する意味と意義を座談会形式で語つてもらいました。

▼次にOosがある地域を知ろうと

いうことで、「私もう終活終えたわよ」と笑う大塚一丁目生まれ育ちの関根由子さんに、この地域周辺のむかし語りと定年後の地域デビューのお話を。

▼Oosでは、mTALKという地

域の人によるトークイベントが人気なのですが、9月に登壇いただいたのは、漆に特化したギャラリー「スペースたかもり」を営む高森寛子さん。関根さんのご紹介です。地元とはいえる人々が、漆と輪島に纏わる興味深いトークを、文京区の地域情報をWeb発信している及川敬子さんによる報告してもらっています。

▼また、東京ケーブルネットワークの

土岐充さんからは、これまた人気コンテンツとなっている「小学生アナウンサー体験教室」の報告を。余談ですが、ここでがんばった小学生が、その後土岐さんの番組に出演したそうです。

▼トリは、今年文京区民になったばかりのきたまりさん。Oosがきっかけで、あれよあれよという間に地域活動にどんどん参加していくフットワークに感服！つながるの先が見えるような気がします。一読あれ。



オトフェス2025に参加したアーティストたち

Interview

地域の よみきかせ

小石川五丁目（茗荷谷駅前）

Alicekan

アリス館

Oosで行っている「絵本の読み聞かせと、おもちゃ作り！」は、主に未就園児の親子の憩いと遊びの場になっています。読み聞かせを担当しているのは、地元出版社のアリス館さん。企業の地域活動への取り組みを、同社の田辺社長と、読み聞かせを担当している編集部の湯浅さん、販売企画部の吉原さんに伺いました。

アリス館というと、茗荷谷駅のホームに大きな看板がありますね。

て』を読むようにしています（笑）。

吉原：看板の絵は、「でんしゃにのって」の表紙をもとにしたものですが、みなさんにアリス館のことを知つてもらうために、最初に「看板ありますよね」っていう導入で、いつも「でんしゃにのつ

田辺：アリス館は、1981年に創業した出版社です。ずっと子どもの本にこだわって、赤ちゃん向けの絵本をはじめ、中学生くらいまでの年齢を対象にした本を作っています。出版社の8割が絵本です。文京区には、1993



読み聞かせをするアリス館の吉原さん（左）と、島崎さん（右）

年に護国寺に越してきて、茗荷谷に移転したのは2016年からです。

どんな本作りをしているのですか。

田辺：子どもたちの豊かな感受性を育てるというところにずっと問題意識があつて、そこを意識しながら作る本というものは、おとなにとつても何らかの響きがあるものだと思っています。ただ単に絵の入っている本を作っているのではなくて、編集企画で、子どものどういう発達段階で、この本はなぜ必要なのか、どんな意味があるのか、ということを議論しながら進めていま

アリス館という個性を大切にしているのですね。

田辺：はい。本というものは、普通は作家で選ばれるのですが、私たちは、出版社のカラーとして、アリス館の本を選んでいただけるようにしたいと思っています。例えば、ヨシタケシンスケさんとか鈴木のりたけさんのような有名作家さんであつても、それをアリス館が作つたらどうなるのか、なぜその本を作るのか、という問い合わせが大事にしています。読者が初めて

触れる作家さんであつても、「アリス館の本なら手に取つてみよう」と思つてもらえたなら嬉しいですね。

湯浅：アリス館の場合は、編集者みんなで議論する、合議制になつています。編集会議は読み合わせをして、それを聞いてどう思うか、作り手の視点もあるのですが、読者としてどう感じ

るかという点の意見を出し合つています。あとは、作家さんの書いた文章を作家さんの前で声に出して読むのですが、それは作家さんも驚いたりします（笑）。そんなことは、あまりないみたいですね。絵の作家さんにも読んで聞かせます。絵本は、声に出して読むものなので、音になつた時にどう感じるかということを大事にしています。



茗荷谷駅の1番ホームにある看板



吉原美優さん
販売企画部



湯浅さやかさん
編集部主任



田辺直正さん
代表取締役

読み聞かせを始めたきっかけは？

湯浅：茗荷谷に移つてきたときに、まず最初に感じたのが、「駅前に親子がいっぱい歩いている」っていうことでした。護国寺はサラリーマンの街だったので、一茗荷谷は学校がいっぱいある！って。ベビーカーを押しているお母さんもいっぱいいて、ここで読み聞かせ会をしてみたいと思いまし。茗荷谷の本社の会議室で2年ほど不定期に行つていたのですが、コロナ禍で中止。その後コロナ禍が収まつ頃に、ちょうどOOSのお話をいただいたのです。会社ではキヤバの心配があるのですが、こんなに広いスペースで、区民のみなさんに告知もしていただけるということなのでやつてみようと思いました。

OOSでの読み聞かせは、どんなやりがいがありますか。

湯浅：やっぱり、真の読者に会えるということが、一番のやりがいですね。読者と話ができる機会はなかなかないのです。会社つて大人ばかりですね。まわりに子どもがいない状況で、いくら社内で読み合わせしても、頭の中で考える子ども像だけになつてしま

ない」っていう、編集者としての決意も新たになるのです。

読み聞かせは、赤ちゃんに読んでいるのですが、お母さんが楽しんでいると、赤ちゃんも喜ぶのが分かります。それを感じられるのが、またいいですね。



それぞれ思い思いのお薦めの本を手に

吉原…常連の方もいらしていて、名前が分かるお子さんも増えているのでそれも嬉しいです。参加していただいた方には、いつもアリス館の目録とシールをお渡ししています。お子さんの成長つて、本当に早いなって感じます。前までは、ベビーカーで来ていたのにもう歩いている。「引っ越ししたけど、Oosの読み聞かせが好きだから来ました」という方もいらして、本当に嬉しいですね。

湯浅さんのウクレレに合わせた歌があるのが本当に楽しいです。

湯浅…相手が赤ちゃんなので、読み聞かせだけだとちてないので、歌を歌つたりとか、音楽を入れています。こちらも音楽が楽しくなっちゃって、最近に感動します。実際読んでみると、「こんなに真剣に聞いてくれる子どもたちがいるから、いいかげんな本は作れませんし、『子どもは絵本が好き』と

いうことは理屈では分かっているのとか、自分の中の想像と実際が乖離しているかもしませんね。「あつ、1歳つてこんなちっちゃいんだ」とかって、実際にふれ合ってみないと分かりませんし、「子どもは絵本が好き」

いる有名な作家さんのお話で、「言葉に絵が付くと絵本になつて、言葉に音が付くと音楽になる」というのを聴いたとき、とても納得しました。本と音楽というのは親しい関係にあって、子どもはその両方が好きだということで、読み聞かせと音楽をセットにしています。童謡とかは、赤ちゃんは歌えませんが、お母さんは歌えるので、お母さんが歌つてると赤ちゃんも嬉しそうになつて、けつこうみんなじつと聴いているんです。だから、あまり知られていない歌ではなくて、みんな知つていて季節の歌をみんなで歌うと、場の一体感も生まれます。

していく、テーマを決めて、本と歌を決めます。私のウクレレの腕で弾けるかどうか、というのが最大のハードルです（笑）。

企業と地域との関わりという観点でお話を伺いたいです。

田辺・実は、文京区に会社があるというだけで、今まで地元には何の関わりもなかつたのが実情です。でもよくよく考えてみると、全国の本屋さんに自社の商品が並んでいるといつてもどこでどういうふうに読者の手に届いているかは見えにくいものです。でも実際に子どもたちに出会えて、読み聞かせできる機会には手応えを感じています。というのも、まずは足元の文京区で本を通して読者と思いを共有する

うだけで、今まで地元には何の関わりもなかつたのが実情です。でもよくよ

く考えると、全国の本屋さんで本を通して読者と思いを共有する

という時間は、出版社としてはとても大事なことなんです。

文京区にアリス館という出版社があるということを区民のみなさんに知つてもらう、その積み上げこそが、自信をもつて全国の読者にアリス館の本を届けられるのだという発想になってきたのです。会社が地域で活動し、溶け込むことは、会社にとって大きな成長になるのです。このOoSの活動を通しての実感です。

湯浅・地域貢献とか、そんなに大袈裟なことはそれほど意識していないのですが、ベビーカーを引いて近所の親子

に来て欲しいなという気持ちが大きいです。実際の子どもやお母さんと会いたいです。お客様さんがゼロだと寂しいのですが（笑）、たくさん来て欲しいとかではなくて、一組でも二組でも、ゆつたり楽しい時間を過ごして欲しい

というものが本音です。赤ちゃんがいると外に出かけるのもなかなか大変なので、気軽に来ていただきたいですね。

今後の方向性を教えて下さい。

吉原・いまの読み聞かせのかたちが評で、私たちも楽しく行えているので、まずはしつかり続けていきたいです。

田辺・文京区には印刷屋さんとか製本屋さんとか、本に関わる仕事が集積しているので、そういうことをもつと区

民の方に知つて欲しいです。また、茗荷谷駅前にも以前はありましたが、本屋さんも今は激減しています。出版産業が危機的な状況になつていて、本にもつと関心が向くような取り組みを区と一緒になつて作り上げていきたいです。

文京区は子どもの数も多い地域なので、本の文化をより広げていければいいなと思っています。

区の商品が並んでいるといつてもどこでどういうふうに読者の手に届いているかは見えにくいものです。というのも、まずは足元の文京

区で本を通して読者と思いを共有する



時には、元気いっぱいに



楽しい歌と演奏も



編集室の様子



はじまりは『でんしゃにのって』



子どもは絵本に興味津々



会の後半は、飛田野美幸さんによる「季節のおもちゃづくり」

今 ふたたび

大

塚

ふるさとで遊ぶ

大塚二丁目住

Yoshiko Sekine

関根 由子



Oos の mTALK VOL.10 で司会を務める関根さん(右)。
左は、講演者の高森寛子さん。

昭和21年生まれなので来年は80歳になる。東京大空襲で焼け出された両親に連れられ、2、3歳の頃、大塚二丁目に来た。以後70年以上今の場所に暮らしている。自分で信じられない歳を前に、人生の数々、特に幼いころの思い出に浸る日々も増えた。

拓大校内が遊び場

家の目の前が拓殖大学なので、幼いころはその校内が遊び場だった。池もあり、小山もあったので、子どもたちにとっては冒険も探検もできるいい空間だった。沼のような池には、春になればトコロテンのようなカエルの卵がオタマジャクシになり、さらにカエルに成長、夏の夜にはカエルの合唱がるさいくらいだった。

また11月3日は毎年拓大の運動会で、その日は近所の人総出で見に行つ

た。パン食い競争あり、仮装行列あり、テレビもまだ普及していない時代、学生たちの奮闘ぶりに拍手を送った。そういうえば、子どもたちに怖がられた守衛さんもいたつけ。坊主頭で兵隊服のような詰襟風の上着を着ていて、子どもたちを見ると箬をもつて追い出していた。多分戦争帰りの人だったのだろう。

野良犬にも風格あり

林泉寺の境内もいい遊び場だった。まだ戦争直後で手入れもされていなかつたので、墓石もあちこち倒れ、雑草も生え、走り回る子どもたちにとつても格好の場所だった。

また本堂の床下は野良犬の住処でもあった。私が高校受験で深夜まで勉強していた昭和30年代、夜になると野良犬の集団が近所を駆け回って抗争していた。その中のボスがタローだった。統率力に優れていたらしく、近所でもタローの名は轟いていた。実際に間近で見たことはなかったが、あるとき、昼間に遭遇した。すでに老いていたが、人間を恐れない歩き方、その風格、一目でタローと分かった。人間でいえば、百戦錬磨の親分といったところか。犬にも風格があるのだと、今でもその姿は忘れない。



自宅から少し離れた藤寺の湧き水も忘れない場所だ。祖母に連れられた。そのたびに石仏に流れ落ちる湧き水を飲んだものだ。きれいでおいしかった。

いつしか変わる町並み

窪町小学校、第一中学校と進んだが、団塊の世代の先駆けでもあり、人数が多く、小学校も中学校も一クラス50人前後で7クラスまであった。共同印刷や製本関係に両親が勤めている同級生が多かったが、今までは、そのほとんどが居ない。

その後、高校、大学、そして就職、昭和40、50年代、日本の高度成長期に合わせて人生も過ぎたが、その間、地

元のことを顧みる余裕もなかった。

いつの間にか、都電が廃止され、また茗荷谷の駅も新しくなり、春日通り

も広くなり、その道路沿いには高層ビルやマンションが林立している。「かつてここにはお風呂屋さんがあり、この路地にはある人がいた。酒屋さん、八百屋さん、魚屋さんもあつたな。」

ふるさとがいつの間にか変わってしまった。独立し自宅を事務所にして50年近くなるが、現役時代にはふるさとを意識することもなかった。

新しい遊び場作り

さて仕事を辞めて8年。改めてふるさとを見つめ直し、そして遊び場を探していた。町内会発行の広報誌作りに誘われたのも良いチャンスだった。

ギャラリーでは、年に何回か漆器の企画展があり、その際には、作り手である職人さんが必ず参加し、自分の作品の紹介や説明をする。作り手の朴訥とした話を聞きながら作品を手に取る

人間にまだまだ興味があり、その取材は今でもとても面白い。地元に改めて視点を向けてみると、いるわ、いるわ、面白い人たちが・・・恰好の遊び相手にもなりそうだ。

友人のギャラリーを紹介

最近、Oo'sのm TALKには、仕事で長年付き合いのあつた高森寛子さんを紹介した。彼女は漆のギャラリー「スペースたかもり」を28年間、小石川で経営してきた。私がワークとして伝統工芸の職人さんの取材を始めたころ知り合い、以後20年以上近所のよしみでお付き合いさせていただいている。

ギャラリーでは、年に何回か漆器の企画展があり、その際には、作り手である職人さんが必ず参加し、自分の作品の紹介や説明をする。作り手の朴訥とした話を聞きながら作品を手に取る

その広報誌では、地域探訪として、地元の神社の謂れや成り立ち、何代も続く店や医院、風呂屋などの取材、地域の歴史としては以前あった商店街など当時住んでいた人たちの対談や、地域の行事の報告など、私にとつては、昔を思い出しながらの大人のふるさと遊びであり、遊び場作りにもなつている。



右：「道路の左側の商店街が消えた」(教育大学前：昭和52年撮影)・写真提供：文京ふるさと歴史館
左：関根さんが地域の人にヒアリングして作成した、昔の茗荷谷駅周辺の商店街マップ。写真と見比べて欲しい

と、単なる商品ではなく、この人の作ったものという温かさが感じられ、愛おしく大事に使いたいと思う。これが作り手の顔が見えることなのだ。こうして知り合った職人たちが何人もいる。

高森さんは「作り手と使い手のつなぎ役」という役目をこのように果たしてきた。「暮らしには、気持ちよく使え生活の中でホツとするものがあることが一番、それには漆器のよさをもつと知つて」という高森さんのメッセージはもっと広がつてもいいと思つている。

インターネットが普及して世の中が変わつても、顔と顔、人間同士の直接の付き合いが基本だ。人生の最終トラックにふるさとでいい遊び場に出会いえ、これからもさまざまな遊び相手に出会える予感に、楽しみが膨らんでいる。

関根由子

1946年文京区生まれ。大塚一丁目住。窪町小・一中卒。日本女子大学社会福祉学科卒業。地方新聞社へ家庭欄の記事を配信する家庭通信社の代表を務めた。長年、各地の女性職人たちへの取材を続けるかたわら、日本文化を再確認し、より楽しむための活動を主宰し、講座、展示会など企画を行ってきた。和くらし・くらぶ代表。著書に『伝統工芸を継ぐ女たち』『伝統工芸を継ぐ男たち』『家庭通信社と戦後五十年史』『生き方・自分らしい生き方を探す』『47都道府県・伝統工芸百科』がある。日本酒は純米酒党。



日本酒大好き!

mTALKレポート

『普段の暮らしに 漆の器を』

取材
Takako Oikawa

及川 敬子



及川敬子

一般社団法人まちのLDK代表理事。1966年、東京都生まれ。文京区在住。新聞記者としてキャリアをスタートし、2008年に保育士資格を取得。2017年には小規模保育園を開園。現在では、保育だけでなく「高齢・子ども世代が共に過ごせるスペース」を開設。Webで地域メディア「JIBUN マガジン」も運営。



一般社団法人まちのLDK
<https://machino-ldk.org/>



JIBUN マガジン
<https://jibunmedia.org/>

高森さんのmTALKに参加
及川 敬子

茗荷谷の漆専門ギャラリー

「漆の器は温かいものも、冷たいものも、酢のもの、油のものも大丈夫。普段の食事に普通に使ってほしい」。2025年9月13日、Oosで開かれたmTALKで、茗荷谷にある漆器専門のギャラリー「スペースたかもり」を主宰する高森寛子さんが漆への思いを熱く語った。インタビュアーは文京区在住の伝統工芸ライター・関根由子さんだ。

スペースたかもりは、茗荷谷の和菓子店「一幸庵」の3階に、28年前オーブンした。一幸庵はかつて桜並木上の春日通り沿いにあり、店主夫妻は、客として通っていた高森さんが工芸品にかかわる編集者で、展示会企画もするところ。時折足を運んだという。一幸庵移転の際、新築ビルの一部屋をギャラリーにしないか、と声をかけてきたそうだ。



高森寛子

1936年東京生まれ、文京区在住。エッセイスト、茗荷谷で漆に特化したギャラリー「スペースたかもり」を主宰。年に5、6回の企画展を開催している。婦人雑誌の編集者を経て、日本にあるさまざまな生活道具を紹介し、作り手と使い手をつなごう、数々の試みを行ってきた。著書に『85歳現役、暮らしの中心は台所』(2022年小学館)等。最新刊は、『輪島と漆』(輪島キリモト代表・桐本泰一氏との共著、垂紀書房)。



スペースたかもり Instagram

もつたない。「おせつかいです。黙つていられない」
かつて、ギャラリーや販売店で扱う漆製品は触ってはいけない、触る時は手袋をはめる、という時代があつたそ
うだが、「触ってみて使ってみて良さ
がわかる。もつたいなくて使えない、
ではなくて、使わないともつたいない
です」。漆は使い込むほどつややかに
なつてくるという。「漆のカトラリー」

3年前、「85歳現役、暮らしの中心は台所」という本を出した。「年齢はずつと隠してきたんですけどね、やむを得ず公表した。そうしたら気が楽になつたわ」と話す高森さん。若々しい米寿だ。「長年茗荷谷でお店を開いていたけど、今回のもTALKで地元に目を向ける大きさに気づいた。地域の高齢者に漆の器でご飯やお味噌汁を振る舞う食事会を開いてみたいですね」

漆に特化したのは「両親が輪島出身で、毎日のみそ汁の椀、おやつ入れ、弁当箱、ごく普通に漆の器があつたから」。ところが結婚して初めて、世の中の家庭では漆は特別なもので、暮らしに採り入れるには敷居が高いと思われていることに気づいた。自分ひとりが漆の良さを知つて使つているのは

ちょうど漆の本を出したところだつた。文章は一方通行だが、客と対面でいるギャラリーなら、作った人たちの気持ちを直接伝えられるのではない。バブル経済がはじけて漆器問屋が立ち行かなくなり、作り手と使い手を直接つなぐ好機でもあつた。「欲しいもの」を買いたいと思っていた私は、時代のいいところにいました



高森さんが愛用している湯呑み



会場には、高森さんの普段使いの漆の器を展示



2024年1月1日早朝、穏やかで美しい輪島の海



思い思いに漆の器を手に取る参加者



「輪島塗 Rescue&Reborn プロジェクト」の器



終了後、希望者は「スペースたかもり」に移動

もおすすめ。口当たりが穏やかで優しいんですよ」

輪島への想い

輪島は2024年1月1日の能登半島地震と、その後9月の豪雨で大きな被害を受けた。スペースたかもりでは、被災した家や蔵から救い出された漆器を洗浄し修復し塗り直し、現代の器として生まれ変わらせる「輪島塗 Rescue&Reborn プロジェクト」を応援している。「やさしくて温かくて食べ物がおいしくて、美しい輪島。地震、洪水で心が折れた方たちに、仕事を生むことができた。どうか、忘れないで、買って使うことで支えていただけたら」

地元に目を向ける



小学生アナウンサー体験教室
in 文京区（あらぶんちょ！ぶらす）



ドキドキだけど、楽しい！アナウンサー体験



小学生アナウンサー体験教室
東京ケーブルネットワーク(株)
Mitsuru Toki

津軽弁と標準語の二刀流。郷土の作家・太宰治の「走れメロス」など音読が好きだった青森の少年が、アナウンサーを志して高校生の時に声と耳を磨き、夢叶って放送人生を歩んできました。その原点である高校の放送部のメ

ソッドで多くの中高生を指導した経験を、文京区で活かしています。

この教室では、大塚地域活動センターの一角が放送室になります。発声・発音の基礎練習から、マイクとカラマラに向かって校内放送アナウンスをする、超濃密な1時間半。子どもたち一生懸命！一人一人の特性を見極め

教室の後子どもたちは「誰がいちばん上手だった？」と私に訊ねます。お互いの発表を聴いて磨き合うのも上達のコツ。大塚地域活動センターの快適な空間を会場に、アナウンスコンテストを開催して放送文化を育む活動も面白そうです。

人前で堂々と発表するチカラは、いつの時代もどんな時も必ず役に立ちます。この教室が子どもたちの成功体験になり、将来の夢へ、さらに豊かな人生に繋がれば何よりです。

土岐 充

東京ケーブルネットワーク(株)

Mitsuru Toki

てアドバイスする私も真剣勝負！子どもたちは、自分の声で表現する喜びとコミュニケーションの楽しさを存分に体験しています。

文京区の 子どもたちに 放送文化を



土岐充
1966年、青森県生まれ。元NHKアナウンサー。NHK退職後は青森朝日放送を経て西会津町ケーブルテレビでコミュニティチャンネルに従事。2019年に上京し、現在東京ケーブルネットワークで番組ディレクターやMCなどでマルチに活躍している。



文京区キタ！

文京区在住
Kitamari



めいたまり

きたまり
2001年愛知県生まれ。大学時代を大阪府茨木市で過ごし、地域活動や第一〇〇sでの練習会に参加して、人生で初めて盆踊りを習得。本番では周りを見よう見まねで踊りました。輪を回むのはまだ顔も名前も知らない人ばかり。でも、太鼓に合わせて一緒に踊ると、不思議と仲間になれた感覚がありました。あのとき感じたのは、言葉なんていらない「非言語コミュニケーション」の団結力。みんなで作り上げるお祭りのパワーに、ただただ圧倒されました。

優しすぎるまち文京区

地域に溶け込むって、もっと時間がかかると思っていました。でも現実は、引っ越して1週間後にはもう「クッキーと桜めぐり*」の裏方。段ボールも片付いてないのに、気づけばイベント参加者のガラポン抽選を見守り景品を引き渡すスタッフをしていました。どうやら茗荷谷は「新参者に優しすぎるまち」みたいです。

大学時代大阪で地域活動をしていた私は、「東京でも何か関わられる場所あるかな」と拠点を探つもりでいました。ところが、まさか自分が暮らす茗荷谷というまちが、こんなに人が行き交い、イベントが次々と生まれる場

まちの「体感を感じた体験

とりわけ忘れないのは、第一中学校や傳通院での盆踊りです。まずは〇〇sでの練習会に参加して、人生で初めて盆踊りを習得。本番では周りを見よう見まねで踊りました。輪を回むのはまだ顔も名前も知らない人ばかり。でも、太鼓に合わせて一緒に踊る

と、不思議と仲間になれた感覚がありました。あのとき感じたのは、言葉なんていらない「非言語コミュニケーション」の団結力。みんなで作り上げるお祭りのパワーに、ただただ圧倒されました。

盆踊りで感じた「まちの「体感」」の余韻が冷めないうちに、次に関わったのが「MITAMUYO!!」という子どもたちがつくるローカルマガジンの企画でした。

「子どものころから自分のまちを好きになるきっかけをつくりたい」——そう思って動くプロのクリエイターさんたちの熱意に、心から感動しました。

写真の撮り方やイラストの描き方を学ぶ講座にも参加して、まるで自分も地域のクリエイター見習い。子どもたちと一緒に、学びながらまちを発信するその時間がとても贅沢で、あたたかいものでした。

茗荷谷には、とにかくイベントが多い。でも同世代と出会う機会はまだ少なく、そこが少し物足りないところです。だから私は、このまちで「地域活動つておもしろいよ！」と共有できる友だちをつくりたい。同世代が気軽に飛び込める雰囲気を広げていきた。そのため、一緒に参加して楽しむ方法を模索中です。学生時代から地域活動経験を持つ自分だからこそできる関わり方があるんじゃないかとワクワクしています。

まちの一員として活動させていただく中で、これからもきっと予想外のドラマに巻き込まれていくんだろうな、と期待しています。

これからは、地域の大学生や若手社会人ともつながりを広げたいと思ってます。



茗荷谷界隈サイコ

*毎年桜の季節に開催される、茗荷谷界隈プロジェクト主催のスイーツなどの素敵なお店を巡るスタンプラリー。Oosuで景品交換を行っている。





7/20 (日)

● オトフェス（音づくりのまち文京区）2025 in Oosato

▶ 音のアーティスト 7 人

いろんな音づくり体験が楽しめる一日でした。

「文京区内外で音の創作活動をしているアーティストたちが、一堂に会してワークショップを開催。作った音を、みんなで楽しみました」



8/8 (金)

● 「Oosato ワークショップ 1」 金融教育の動画制作ワークショップ in 文京区

▶ 一般社団法人日本金融教育支援機構

中高生が動画で「お金の大切さ」を伝えるコツを学びました。

「探究・表現・創造を大切にした学びを通して、自分の言葉で“金融”を語る力を育む、実践的なプログラムでした」



8/23 (土)

● 「Oosato ワークショップ 2」 語り合えるスゴロクで遊ぼう！—人生のパズルが、つながる。

▶ 支 めぐみ（ナニモノソウル開発者／自己認識コーチ／キャリアコンサルタント）
スゴロクを通して、自分の経験・想い・夢が物語になりました。

「スゴロクを進めるほどに仲が深まるコミュニケーションゲームを通して、自分自身の理解とプレイヤー同士の絆が深まりました」



8/30 (土)

● 【東京ケーブルネットワーク】小学生アナウンサー体験教室

▶ 土岐 充（東京ケーブルネットワーク番組ディレクター、元 NHK アナウンサー）
体験した小学生が、実際の番組のナレーションも体験しました。

「現役のアナウンサーによる、アナウンスの基本練習、アナウンサー体験。人前で話す力や表現力を高めることにもつながります」



9/6 (土)

● 「Oosato ワークショップ 3」 地域に開く、自分のトビラー対話から見つける、あなたの「これから」と「できること」

▶ 芦沢 壮一（スキルノート主宰）

地域の中での役割や自分の強みを、対話を通して見つけていく時間でした。

「何か始めたいけれど、何ができるかわからないという方におすすめでした」



9/13 (土)

● 「mTALK（茗荷谷界隈トーク）VOL.10」 普段の暮らしに漆の器を

▶ 高森 寛子（スペースたかもり）

茗荷谷で漆のギャラリー 28 年の物語を語っていただきました。

「漆の使い手仲間を増やしたいという一心で、その美しさ、心地よさを伝えてきた 28 年間。漆と輪島のお話、その思いを聞きました」



9/26 (金)

● 「Oosato ライブ」 “オトナの童謡” を楽しむ

▶ 鈴木 あい（シンガーソングライター、童謡アーティスト）

このライブをきっかけに、地域のイベントで披露する場が生まれました。

「懐かしくも新しい、オトナのための童謡時間。記憶に残る美しい曲を参加者と一緒に歌いました」

Oosイベント一覧（令和7年度前期）



4/4（金）～6（日）

● 第6回クッキーと桜めぐり



景品交換所としてオープンスペースで交換をしながらOosの活動紹介です。

「お気に入りのお店、初めてのお店、茗荷谷界隈にはきっとまだあなたの知らない素敵なお店があります。界隈の桜（播磨坂や植物園ばかりでなく）を眺めながらそれぞれのペースで楽しみました」



4/10（木）、6/12（木）、8/7（木）

● 【アリス館連携企画】絵本の読み聞かせとおもちゃ作り

▶アリス館

未就園児の子を持つ親子の顔の見えるつながりにもなっています。

「ほっこりするお話をたくさん用意しています。よみきかせの後は、簡単なおもちゃを作ります。0歳のお子さんから参加しています」



4/17（木）

● 「Oos体験会2」心と姿勢を整えるヒールウォーク2



▶酒井 純子（ウォーキング・コンテストトレーナー）

歩き方だけでなく自信も引き出すヒールウォーキングで、元気をもらいました。

「歩く技術と共に大切な事はマインド作りです。美しく歩くことで、女性が明るく楽しくなることにつながる教室でした」



5/11（日）

● 「Oos体験会3」音楽×アート～音楽から物語を描こう～

▶つかだ ゆうこ（音楽から子どもの自信を育む専門家）

描いた絵を、みんなの前で自ら発表する姿を見て、親御さんも驚いていました。

「子どもたちの感性を音楽・絵・言葉で引き出します。音楽を聴いて曲のイメージを言葉や動きで共有し、思いのままに絵を描きました」



6/14（土）

● 【印刷博物館・b-lab連携企画】マイノートをつくろうー中綴じ製本体験

▶印刷博物館

実際に使える自分だけのノートを作り、製本の仕組みを学びました。

「製本について気軽に学べる40分です。印刷博物館で行っているワークショップをOosに出張して行うプログラムです」



7/3（木）

● 江戸の切り紙「紋切り」で知る文様文化

▶下中 菜穂（造形作家、昭和のくらし博物館副館長）

手を動かしながら暮らしの中で育ってきた日本の「かたち」の文化を味わいました。

「紙を折りたたんで型紙の通りに切って開くと紋切りができます。できた和紙の紋切りを貼って素敵なおうちわが出来上がりました」



7/5（土）

● はじめての盆踊り練習会2025

初めての方向けに盆踊りの練習会を開催しました。

「今まで踊ったことが無い方、いつも輪の外で眺めていることが多い方にお越しいただきたい練習会。踊る前に知っておいた方が良いこと、東京音頭、炭坑節など、どこでも掛かりそうな優しめの曲を中心に練習しました」

Oos

MAGAZINE EPISODE.2

2025年11月30日発行

発行：大塚地域活動センター オープンスペース企画事務局

（運営：図書館流通センター／Myogadani Lab.）

E-mail : otsukaop@gmail.com

制作：Myogadani Lab.

Oos住所：文京区大塚 1-4-1 中央大学 茅荷谷キャンパス 2 階

